

米山 裕・河原典史 編

『日系人の経験と国際移動—在外日本人・移民の近代史—』

人文書院 2007年3月 276頁 2,500円＋税

典型的な学際的分野といえる移民研究は、近年飛躍的に発展している。本書は、移民研究の長い伝統があり、日本におけるそのメッカのひとつといえる立命館大学の研究者が中心となって刊行した、日本人移民に関する学際的研究の論文集である。編者を含め執筆者は中堅から若手の研究者であり、専門分野も歴史学、地理学、社会学、地域研究と多岐にわたっている。

詳しい紹介に入る前に、まずは目次を記しておこう。本書の目次には部や章という語は用いられておらず、部に相当する部分にローマ数字の番号が付されているのみである。しかし、ここで便宜的に序章とした米山氏の論考における各章の紹介では章番号が付されており、ここでもそれにしたがうことにする（なお、第10章は第IV部には属さず、まとめ・展望の章として独立した形になっている）。

序 章	環太平洋地域における日本人の移動性を再発見する
第I部	移動とエスニシティ
第1章	二つのジャパニーズ—移動とエスニシティの現代社会論に向けて—
第2章	選択的・戦略的エスニシティ—和太鼓と北米日系人コミュニティの再創造／再想像—
第II部	移動の焦点としてのハワイ
第3章	ハワイ日系二世のアイデンティティと政治参加—1920年代から1930年代の指導者たち—
第4章	ハワイ日系コミュニティにおける日本映画の経験
第5章	ハワイの越境日本人・日系人野球とアイデンティティ—1890年代から1920年代までを中心に—
第III部	漁業と漁民の国際移動
第6章	カナダ・バンクーバー島西岸への日本人漁業者の二次移住—クレヨコット・トフィーノ・バムフィールドを中心に—

第7章	漁業移民の社会的関係性—1930年代アメリカ・メキシコ国境海域の漁業活動から—
第IV部	朝鮮と日本人の移動
第8章	朝鮮における日本人農業移民—東洋拓殖と不二農村の事例を中心として—
第9章	植民地朝鮮へ渡った軍需缶詰工場—竹中缶詰製造所の資料から—
第10章	新しい移民史研究にむけて

それでは章ごとに内容を検討していこう。編者のひとり米山氏による序章「環太平洋地域における日本人の移動性を再発見する」では、現在の在外日本人と過去の日本人移民の海外生活体験に共通性や連続性が見出せるだろうかと問いかけ、本書の目的を「近代の日本人の国際移動を再検討すること」にあるとする。そして、従来の移民研究を「アメリカ合衆国からエスニック・スタディーズを輸入して、地域研究の枠内で成立した移民研究」、「主として地理学の一分野として進められてきた出移民研究」（「地理学の一分野」にはやや抵抗を感じるが）、「拓殖民とも呼ばれたアジア・太平洋地域への移民研究」とに分け、それらの限界を指摘する。そして、「日本人の歴史的体験をより良く理解するために、「日系人」パラダイムから「越境日本人」パラダイムへの転換」を主張する。それは、「移動」を中心概念として近代日本の海外労働・生活体験を再評価することであり、また、「日本人」と「日本」との多様な関係のあり方を再発見することであるという。さらに、国内に居住するさまざまな外国人と日本人の垣根を低くして、多様な社会参加のあり方を積極的に評価する見方にもつながるとし、「越境日本人」パラダイムは、多文化・多言語や共生といった現代社会を理解するためのキーワードを含むことになると述べる。そして、各章の内容を概観した後、「新しい移民研究の方向性」として次のことを指摘する。すなわち、環太平洋地域には「第二次世界大戦までに、人・物・金が移動する地域システムが形成されていた」とし、日本人の国際移動はこのシステムを構成する重要な要素であったとする。最後に、本書のアプローチは、国際労働力移動研究、トランスナショナルな歴史研究、世界システム論的アプローチ、グローバルヒストリーの発展に触発された「環太平洋地域における日本人

の国際移動をグローバルな歴史展開としてみる試み」であるとする。

続く第Ⅰ部「移動とエスニシティ」は、現代社会を取り上げた2つの論考からなる。第1章「二つのジャパニーズ—移動とエスニシティの現代社会論に向けて—」(南川文理)は、戦前の日本人移民の子孫である日系アメリカ人と、戦後移住者や長期滞在者など、日本との実質的なつながりを保持している在米日本人という「二つのジャパニーズ」の現代的特性を「個人化」という視点から検討し、現代的な意味でのエスニシティやアイデンティティの形成メカニズムを明らかにしている。

第2章「選択的・戦略的エスニシティ—和太鼓と北米日系人コミュニティの再創造／再想像—」(和泉真澄)は、本質主義的エスニシティ論を脱却する立場から、北アメリカにおける日系人の太鼓奏者に着目し、エスニック・アイデンティティの形成と強化のプロセスを明らかにし、その社会的・政治的意味を検討する。そのなかで、そもそも現代の和太鼓自体が日本の伝統芸能と他の芸術様式との混淆によって生まれた音楽であることを指摘する。そして、太鼓を日系人、とくに3世が自己主張の手段として取り入れていったこと、政治的なメッセージを訴えるツールとしての機能を果たしていることを明らかにしている。

第Ⅱ部は「移動の焦点としてのハワイ」としてハワイをフィールドとした3編の論考で構成されている。第3章「ハワイ日系二世のアイデンティティと政治参加—1920年代から1930年代の指導者たち—」(物部ひろみ)は、1920年代から1930年代にかけてのハワイにおいて指導的立場にあった年長二世に着目し、「100%アメリカン」と「太平洋の架け橋」という2つの概念をどのように取り入れ実践したのかを日系市民協会と坂本正雄の事例を通して検討する。そして、1920年代後半では法や制度においては「100%アメリカン」でも、文化的・心情的に「太平洋の架け橋」であることが可能であったが、1930年代後半には文化的・社会的にも「100%アメリカン」であろうとする動きが強まったと指摘する。そのうえで、彼らは公民権運動以前のアメリカの価値体系という制約のなかで最良の戦略を自ら選び取ったと結論づける。

第4章「ハワイ日系コミュニティにおける日本映画の経験」(権藤千恵)は、映画という意表を突く題材に着目してハワイの日系社会を検討する。無声映画の時代には弁士が日本とハワイ、さらには北米大陸との間を往来し、ハワイではプランテーション耕地での野外上映が行われたという。そして、弁士たちは映画を通じて祖国の流行や出来事を伝え、移住先で文化を再構築する役割を果たしたことを指摘する。さらに、トーキー映画が上映されるようになった1930年代から日本映画館が建てられるようになったことを示し、映画が日本とハワイを結ぶ日系人の重要なメディアとして積極的に受け入れられていたとする。そのうえで、作品の巧拙ではなく、祖国の文化に触れ、日系の各世代が日本の記憶を共有するために日本映画を経験することが日系人にとって重要だったと指摘する。

続く第5章「ハワイの越境日本人・日系人野球とアイデンティティ—1890年代から1920年代までを中心に—」(清水さゆり)は、スポーツを世代や性別、経済的階層などを超越して地域コミュニティの凝集性や集団帰属意識を維持・拡大再生産する文化装置としての統合機能を果たすと考える立場から、野球を取り上げてハワイにおける日系人のアイデンティティを検討する。その結果、野球が民族意識高揚の手段から、アメリカへの同化促進手段としての機能を強めていくことを明らかにし、このことは世紀転換期のアメリカ本土で流通していた「国民化」の手法に、ハワイ日本人・日系人社会の民族意識が次第に吸収・収斂されていく過程の一局面であったと指摘する。

第Ⅲ部は「漁業と漁民の国際移動」であり、カナダ西海岸とメキシコを事例とした2つの論考が含まれる。第6章「カナダ・バンクーバー島西海岸への日本人漁業者の二次移住—クレヨコット・トフィーノ・バムフィールドを中心に—」(河原典史)は、日系カナダ人漁業者の移住を論じる。これまでの日系カナダ人の研究では、漁業を扱ったものでもバンクーバー市とその周辺をフィールドとしたものがほとんどであり、バンクーバー島沖での漁場の発見と漁業者の移住は注目されてこなかった(まぎらわしいことだが、バンクーバー市は本土にあり、バンクーバー島とは別の場所である)。また、言語を問わず、名簿類など歴史地理

学的に有用な資料が十分に活用されてこなかったという。そこで本章では、そうした資料に基づいて日本人漁業者の移住のプロセスを明らかにする。そのうえで、彼らは差別的な境遇から居住地が限定されたのではなく、漁業者として最適な場所を選択していること、さらには土地所有も許可されていたことを指摘する。日本人移民の二次移住自体、研究の蓄積があまりないと思われるので、その意味でも貴重な研究成果であろう。

第7章「漁業移民の社会的関係性—1930年代アメリカ・メキシコ国境海域の漁業活動から—」(杉山茂)は、アメリカ・メキシコ国境海域の漁業活動における日本の水産業資本と在墨日系人との関係を検討する。そして、1920年代以降、日本とメキシコは漁業技術協力という形で人脈的つながりを発展させており、それには在墨日系人がメキシコ人実業家やアメリカ合衆国にもっていたコネクションが大きな役割を果たしていたことを明らかにする。

第IV部は「朝鮮と日本人の移動」である。第8章「朝鮮における日本人農業移民—東洋拓殖と不二農村の事例を中心として—」(轟博志)は、朝鮮半島開発のために設立された国策会社である東洋拓殖が1910年から1926年まで実施した農業移民を概観し、それが日本による朝鮮統治初期の武断統治の産物であることを指摘する。さらに、東洋拓殖に代わる資金力のある主体として参入した民間資本の例として、朝鮮で「水利王」の異名をとった、徳島県出身の藤井貫太郎による日本人農民の移住村「不二農村」の事例を紹介する。ただ、時期や主体の違いはあるにせよ、朝鮮への移民は国策に沿って進められ、政府の直接的あるいは間接的支援によって成立していたという点で特殊であるとする。そして、このことにより「棄民」が発生しづらい反面、移民たちは政府に統制され、植民地統治の先鋒となることを求められたと結論づける。

第9章「植民地朝鮮へ渡った軍需缶詰工場—竹中缶詰製造所の資料から—」(河原典史)は、戦前に軍需缶詰工場を日本と朝鮮で展開した竹中缶詰製造所の写真や工場の図面などに基づいて、昭和初期の軍需工場的一端を紹介している。竹中缶詰製造所の朝鮮進出は、1923年から1928年の間に設立されたとみられる済州工場が最初であり、繁

殖能力を失った高齢の牛の活用による牛肉缶詰の製造が中心であった。その後、本社のある京都の工場と同様にグリーンピース缶詰が主力製品となり、その多くが欧米に輸出されたという。竹中家は、朝鮮総督府要人らの支援を受け、除虫菊など缶詰以外の事業にも進出した。本章は十分に研究が蓄積されていない植民地期朝鮮の産業施設に関する若干の紹介にとどまっているが、図面など限られた資料でも詳細に分析することで多くのことを明らかにしうることを示している。今後の研究の進展が期待される。

第10章「新しい移民史研究にむけて」(坂口満宏)は、本書のまとめの役割を担う章といえる。本章ではまず、日本人移民の全体像を探ろうとする従来の研究動向を、「勢力圏」・植民地研究、「非勢力圏」に移住した日本人移民の研究、二つの領域を結びつけた新しい研究、の3つに整理する。そのうえで、移民史研究の課題として、移住者送出の構造、安価な労働力移動の連鎖、戦争協力「国民になること」／「国民であること」、還流、の4つを提示し、それぞれの具体的なテーマについて言及している。

以上にみてきたように、本書がカバーする領域は非常に広く、それ自体が本書の特色であるともいえる。とくに、映画や野球、あるいは産業を通じて、環太平洋地域で活動する戦前の日本人の姿がまるで目に浮かぶように生き生きと記述されており、序章の米山論文が指摘する「人・物・金が移動する地域システム」としての環太平洋地域を描くことに成功している。そして、このイメージを具体的なものに行っているのが、各章の扉に描かれている地図であり、環太平洋地域における日本人の活動の視覚的な理解に大きく貢献している。これらの地図は、立命館大学文学部地理学教室で実習助手を務めた飯塚隆藤氏(現・立命館大学研究員)が作成したものであり、地図化という作業が学際的分野で地理学の独自性・有用性をアピールする一つ的手段であることを改めて認識した。

一方で、第II部と第IV部がそれぞれハワイと朝鮮という地域でまとめられているのに対し、第III部は漁業という産業でまとめられている点など、構成にはやや疑問を感じる部分もある。なぜハワイと朝鮮をとくに取り上げるのか、その間になぜ

漁業移民の話題が取り上げられるのかなどについて、説得力のある説明はなかったように思える。既発表の論文をもとにした編集書の限界かもしれないが、たとえば「環太平洋地域の地域システム」という観点から何か説明があると、より魅力的になるのではないかという気がした。

また、序章では「越境日本人」パラダイムへの転換が主張されているが、あとに続く事例研究の各章では「越境日本人」という用語があまり使われていないのが気になった。序章の指摘には十分に興味をそそられるだけに、今後の展開に期待し

たい。

このように若干気になる点があるとはいえ、研究分野や対象地域によってバラバラに研究が進められてきた日本人移民研究を統合する試みは始まったばかりであり、本書がその貴重な成果であることは言うまでもない。近代日本を考えるうえで、あるいは環太平洋地域の関係史を考えるうえで、日本人移民という要素は重要であろう。多くの人に一読をすすめて、時宜を逸してしまったにもかかわらず、ここに紹介する次第である。

(大石太郎)